Broomsticks: Walter De La Mare

紀田順一郎　荒俣宏　責任編集

世界幻想文学大系 10

国書刊行会

世界幻想文学大系　責任編集―紀田順一郎＋荒俣宏
第十巻

魔女の箒

昭和五〇年十一月一日印刷　昭和五〇年十一月一五日初版第一刷発行　昭和六一年八月二〇日初版第三刷発行
著者――ウォルター・デ・ラ・メア
訳者――脇明子
発行者―佐藤今朝夫　発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本――杉浦康平＋鈴木一誌
印刷――セイユウ写真印刷株式会社＋凸版印刷株式会社　製本――大口製本印刷株式会社
定価――二、三〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします

脇明子わきあきこ
一九四八年、香川県生れ。
東京大学教養学部卒業後、
同大学院博士課程（比較文学、
比較文化）修了。
現在、盛岡大学助教授。
専攻　比較文学、風景論。
主要著訳書――
『幻想の論理――泉鏡花の世界』
講談社（現代新書）、一九七四年。
マキリップ『イルスの竪琴』
早川書房、一九八一年。

世界幻想文学大系——第十卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魔女の箒

ウォルター・デ・ラ・メア——脇明子＝訳

目次

9 ―― 魔女の箒　ウォルター・デ・ラ・メア
11 ―― オランダ・チーズ
23 ―― 魔女の箒
61 ―― 訪れ

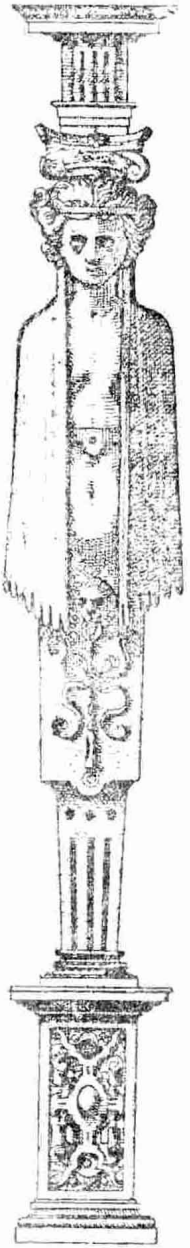
81 ―― 三匹の高貴な猿
82 ―― 第一章
100 ―― 第二章
120 ―― 第三章
132 ―― 第四章
146 ―― 第五章
162 ―― 第六章
178 ―― 第七章
190 ―― 第八章
202 ―― 第九章

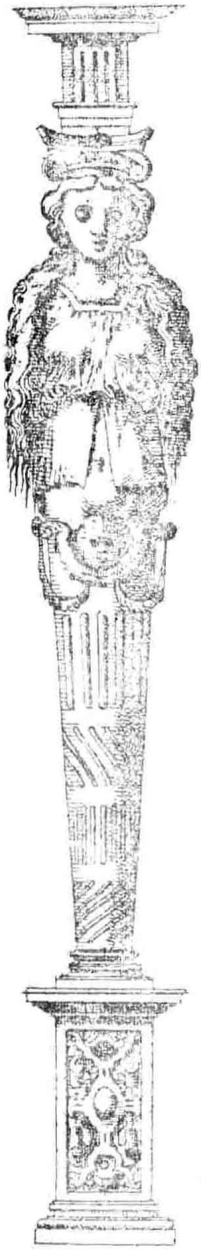
218 —— 第十章
242 —— 第十一章
256 —— 第十二章
264 —— 第十三章
278 —— 第十四章
290 —— 第十五章
306 —— 第十六章
318 —— 第十七章
330 —— 第十八章
344 —— 第十九章
356 —— 第二十章

366——第二十一章
380——第二十二章
392——第二十三章
410——第二十四章
415——孤独な眼——脇明子

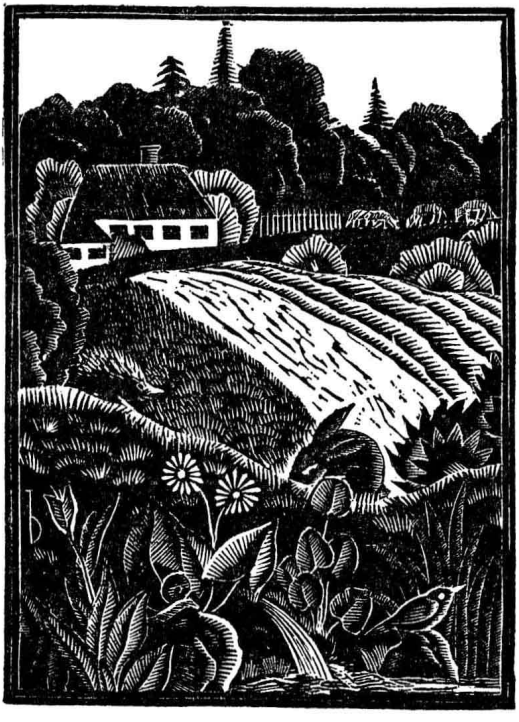
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魔女の箒





オランダ・チーズ



Broomsticks

昔むかし、オグーの森のそばの一軒の小屋に、ジョンという名の若い農夫が妹のグリセルダといっしょに暮していた。この兄妹はたったふたりきりで、いっしょにいるのは牧羊犬のスライと、羊の群れと、森のたくさんの小鳥たちと、それに妖精たちばかりだった。ジョンは妹を言葉に尽せないほど愛していたし、スライをも愛していた。また、たそがれどきに暗い森の縁で小鳥たちが歌うのを聞くのも好きだった。だが妖精たちについては、かれはかれらを恐れ、憎んでいた。かれはとても頑固な心の持ち主だったので、恐れれば恐れるほど、それだけいっそうかれらを憎んだ。そしてかれが憎めば憎むほど、かれらの方ではそれだけいっそうかれを悩ますのだった。

さてこの妖精たちはというと、かれらはずるくて悪戯っぽい、小さな油断のならない種族であって、あの高貴で静かな、人間と距離を保っている妖精たちの一族とは違っていた。いわばかれらは妖精のうちのジプシーであり、すばしこくてふざけまわる空気のような一団を成していて、半分は悪戯から、また半分は愛情から、ジョンの大切な妹のグリセルダを連れ出そうと、音楽や果物や踊りでいつも誘いかけてばかりいた。かれは、何年も前に哀れな年老いた父親を森へおびき出したのがかれらの仕業だということを、ほぼ確信していた。父親はろばを連れ、羊皮の帽子をかぶって、たきぎを切りに出たきりいなくなった。そしてそのあとすぐ、

かれの行方を捜しに行った母親も同様のことになってしまった。

だが妖精たちは、この小さな種族にしても、人間を憎んでなどいなかった。かれらは悪戯をしたし、嘲りもした。かれらはかれのミルクをこぼし、雄羊たちに乗っていってしまい、年とった雌羊にノゲシとブリオニアの花輪をかけ、たきつけに水をかけ、井戸の中につるべを落とし、かれの大きな皮靴を隠してしまったりもした。けれどもこんなことをするのはみんな憎しみのためではなく――グリセルダのまわりをうろつくときなどは、夕暮れの蛾のように静かなものだった――かれが恐れと怒りのあまり妹を隠そうとするからであり、またかれが不機嫌で愚かだからでもあった。だがかれはやはり自分をいらだたせるようなことばかりやっていた。かれはかれらに罠をしかけたが、つかまるのはムクドリばかりだったし、月明かりでラッパ銃をうてば、傷つくのは羊たちだった。またかれらの通り道に酸っぱくなったミルクの皿を置いたり、草地の中に緑色に浮きあがった踊りの輪のところに、ねばねばした木の葉や茨のとげを置いたりもしたが、そんなことは何の役にも立たなかった。また夕闇の中に遠くかすかにかれらの妖精の音楽が聞こえて来ると、かれは戸のところに座って、黒い森から悲しげで厳粛な樹々の声が木霊してくるまで、父親の大きなバスーンを吹き鳴らした。だがそれにもまた何の効果もなかった。とうとうかれはひどく気むずかしくなってしまい、それがグリセルダをすっかりみじめにした。彼女の頬からは赤味が消え、眼はきらめきを失った。すると妖精たちはかれらのかわいいグリセルダ、この愛すべき人間の子が死んでしまうのではないかと恐れて、本気でジョンを困らせるようになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.